盲ろう乳幼児の母子支援に関する一事例

林　徳子

乳幼児教育相談において、母子間で気持ちを通わせ、共感できる関係を育むことは、乳幼児のコミュニケーション支援を考える上で要となる。本稿では乳幼児教育相談（通称けやきルーム）における盲ろう重複障害を有する乳幼児の母子支援の経過について、聴覚的な支援、子どもに対する支援、母親に対する支援についてまとめる。

【キーワード】　乳幼児教育相談　盲ろう　母子支援　自己肯定感

1　はじめに

本校の乳幼児教育相談では、0～2 歳の乳幼児とその保護者（主に母親）への支援を行っている。乳幼児期は、母子間で気持ちを通わせる実感がもてるようになっていくことが大切であり、そのためのより手厚い支援が必要となる。これは、聴覚以外の障害を合わせ待っている場合においても同じである。

本稿では、乳幼児教育相談における盲ろう重複障害を有する乳幼児の母子支援について報告する。

2　目的

盲ろう重複障害を有する乳幼児の母子支援について、 具体的な取り組みや配慮について明らかにし、今後の支援のあり方の一助とする。

3　方法

対象乳幼児（以下：Ａちゃん）の１歳３ヶ月～２歳 11 ヶ月までの指導記録、ビデオから、実践事例を取り上げ、考察を加えていく。

Ａちゃんについて

出生時、24 週、703ｇ

未熟児網膜症

平均聴力　　両裸耳　　：６０ｄＢＨＬ

　　補聴器装用：４５ｄＢＨＬ

盲学校の乳幼児教室（週１回）

けやきルームの個別指導（月 1、2 回）

１歳３ヶ月～2 歳 11 ヶ月

（修正月齢：11 ヶ月～2 歳 7 ヶ月まで）

4　Ａちゃんの支援

Ａちゃんの支援に当たり、大きく３つの視点に立って考えた。

(1)　聴覚的な支援

乳幼児の段階では、正確な閾値を把握するために、家庭での様子を聞き取ったり、遊びの様子を観察したりするなどの日常観察が重要な手がかりとなる。

Ａちゃん特有の聞こえの反応をつかむために、聴力検査やエレクトーンの音への反応や声への反応などを複数の担当者で観察していった。Ａちゃんの場合、検査音やリズム遊びの音が止まった時、聴き取ったリズムと同様に小さくプププと口をならしたり、「タッタッタッ～」と声を出したりする様子を手がかりとしながら聞こえの様子をつかみ、補聴器のフィッティングを行っていった。

(2)　Ａちゃんへの支援

視覚面への配慮として、次のようなことを行ってきた(表１)。

表１　視覚面への配慮

<配慮した点>

◆ 安心して過ごせる空間作り
環境構成－物の配置を同じにする
人的環境－ネームサイン
行動の見通し－動きの変わり目に
声をかけて知らせる

◆ Aちゃんの感情を受け止めたことを，すぐに身体全体で伝える－表情の補い

◆ 常にAちゃんが人といる感覚が得られるようにする。

まず、Ａちゃんが安心して過ごせる空間作りである。物や空間の探索にじっくりと時間をかけるＡちゃんに、同じ場面で同じように声をかけていくことで、次第に聴覚を探索の手がかりにできる場面が出てきた。

また、表情による感情表現の伝わりにくさを補う方法として、こまめなスキンシップと声かけで応じていった。具体的には、うれしい時に、「やった～」と言いながら抱きしめてリズミカルに身体を揺らしたり、いたずらをしている時に、「しないよ」といいながらＡちゃんの両手に教師の両手を重ねたりした。このスキンシップと声かけによる応じ方は、Ａちゃんの気持ちの動きに合わせて、時間をあけずに即応していくように配慮した。それによって、自分と同じ気持ちになってくれる人がいることがＡちゃんによりよく伝わり、人と関わる心地よさが感じられるようになる。同じ場面で共に笑ったり関わったりする大人がいる時に、Ａちゃんの笑い声や表情の変化が多く見られたことからも、それがいえるであろう。また「しないよ」と行動を止められる時も、即応することで、何をとめられているのかがより伝わりやすくなった。何度かくり返すが、そっと手を伸ばして大人の反応をうかがうようなしぐさをし、Ａちゃん自身が自分なりの理解を確認する場面もみられるようになった。

さらに、常にＡちゃんの身体に触れていたり、スキンシップを図ったりしながら、「常に人といる感覚が得られること」にも配慮した。例えば、教師と母親が話をしていて、Ａちゃんに直接関わっていない場面でも、Ａちゃんに触れていたり、他の教師が関わったりするようにして、一人にならない状況をつくるようにした。これによって、プレイルームでは、Ａちゃんが自分から、教師と母親の間に寝転んで、つま先やひじでそれぞれ二人に触れていたり、離れてもすぐに戻ってきて甘えたりする場面がみられるようになった。

コミュニケーションの力を育てていくための一つの方法として、Ａちゃんからの発信を引き出す支援を考えていった。「見通しの先に、人が関わっている安心感を育てること」をねらいとし、「見通しを持ち、期待して待つこと」、「人と意味を共有することの心地よさを味わうこと」を軸に遊びの構成や教材の選定を行った。実際の場面では、ふれあい遊びの中で、声かけや歌の切れ目を合図にくすぐったり、抱き上げてゆらしたりして、期待して人の声や音を聞ける場面を構成した。また聴覚を活用する場面づくりも心がけてきた。音楽や歌を用いたふれあい遊びを積極的に取り入れたり、場面や動きに応じて細かく声をかけたりすることに配慮した。

また、人との関係の中で、満足するまで遊びきる感覚も大切にしてきたところである。図１は、同じリズム遊びをＡちゃんが満足して他の遊びを始めるまでくり返した時の行動の変化である。

図１　リズム遊びをくり返した時の行動の変化

一見、同じ遊びのくり返しなのだが、よく観察してみることで、Ａちゃんにとって、１回１回が積み重なり、広がりを見せていっているということがわかった。自分なりに状況がつかめるまでは、教師とふれあうことを求めたが、見通しを持って楽しめるようになってくると、自分から手を離して遊び始めたり、動きに変化をつけたりし始めた。離れて遊び始めた場合にも、しばらくして大人のいるところまで戻ってきていた。

他の場面と照らし合わせてみた時にもやはり、Ａちゃんは多くのくり返しのなかで１回ごとに少しずつ違った姿を見せることがわかってきた。

これは、Ａちゃんにとっての「くりかえし」の意味や、くり返しながら時間をかけて積み上げていくことの大切さを母親と再確認できた機会となった。

(3)　母親への支援を考える

母親への支援として、母子間で気持ちを通わせる関係作りを支える具体的な方法を考えていった。

Ａちゃんの行動には、本人なりの気持ちや意図が表れている。その気持ちに思いを寄せることから気持ちの通い合いが始まると考えた。

まず、母親がＡちゃんの小さな変化や行動の意味を読み取ろうとする意欲や気づきを支えていくことをねらいとした。そのための方法として、小さな変化や行動の意味を、まず教師が細かくつかみ、母親にわかりやすい場面や例えに置き換えて伝えるようにした。その際、教師の意図を母親がどのように受け止めたかに十分注意を払いながら丁寧にすすめていくことに気を配った。

図２は､教師と母親が｢じっとしているＡちゃん｣の姿を見ながら話している内容の一部を書き起こしたものである。

指導開始初期では、教師がとらえたＡちゃんの何気ない行動やしぐさ一つ一つを丁寧に話題に取り上げるようにした。Ａちゃんの行動の意味に目を向けてもらえることをねらいとし、そこで考えられるＡちゃんの気持ちを会話の中で母親にこまやかに伝えるように配慮した。また、今目の前で見られている姿が、Ａちゃんの成長にとってどのような意味があり、家庭での生活場面でどのような実践に結びつけていけるのかも話題にあげるようにした。１年後には、母親の言葉の中に、Ａちゃんの気持ちを読み取ろうとしている言葉が多く聞かれるようになった。話している時の母親の表情もとても柔らかく、Ａちゃんの行動やしぐさの意味や思いをわかろうとするまなざしからも、意識の変化が伺えた。

これは、今後Ａちゃんの発信をさらに引き出していくための大切な姿であるといえる。

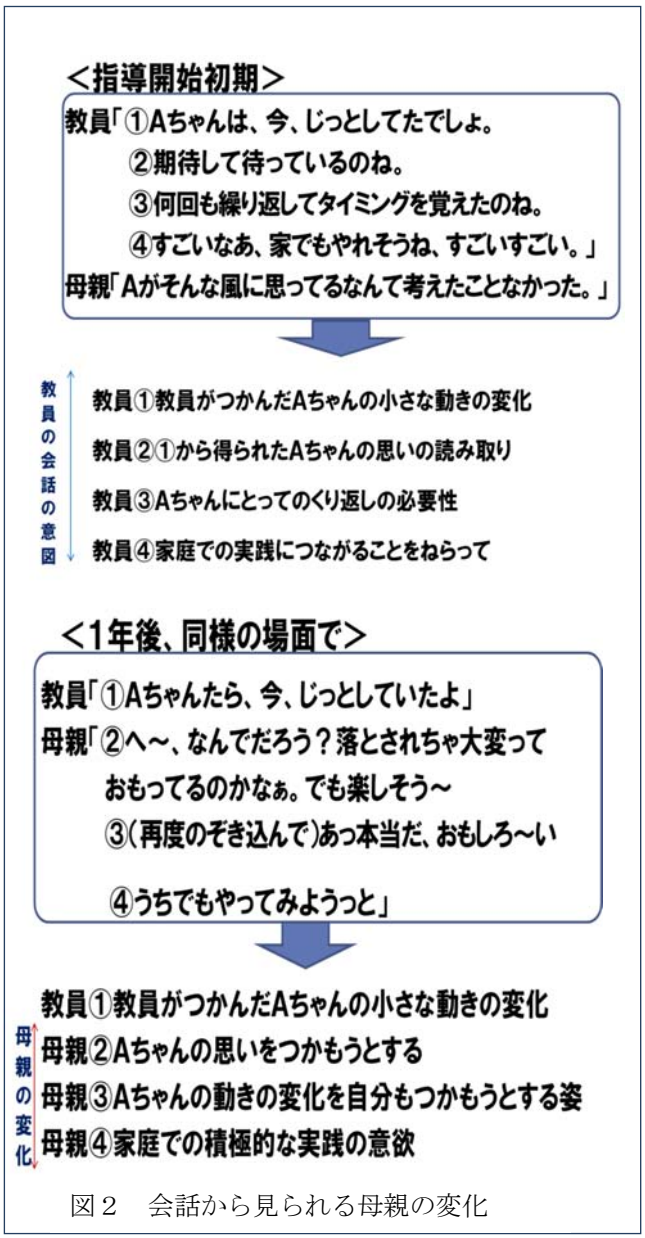

図２　会話から見られる母親の変化

教師側の気づきを伝えていく場合には､｢どうしてだろうね｣｢～って思ってるのかなあ｣と必ず主体を

Ａちゃんの気持ちに置き、それをからめながら、母親と一緒に考える時間をじっくりとるようにした。時に、「よくわからないね」となることもあるが、むしろ、そういう機会も大切にしながら、母親自身の気づきにつなげていきたいと考えた。

多くの時間がかかっても、母親と共に子どもをみて、感じ、話し合いながら気づいてもらうというプロセスをたどることが、結果的には母親の自己肯定感を支え、意欲的な子育てにつながることを実感している。

また、伝えたい意図を整理しておき、会話の随所で触れていくようにした。母親とのとりとめのない会話の中で、流されがちになる要点を絡めていくための観点を整理しておくことは、非常に有効であった。

5　まとめと今後の課題

小さな変化をつぶさにとらえ、それに即応していく手厚さと細やかさは、外への発信が弱い時期にこそ必要なものである。今回、母親がＡちゃんの気持ちの動きに目を向けようとすることが増えた点から、子どもの行動やしぐさの読みとりを教師と母親とが共に考え、積み重ねていくことの意義は大きいといえる。

また、教師から母親に伝えたい観点をあらかじめ整理しておくことで、とりとめのない会話の中にも、アドバイスに必要な観点を組み込んでいくことができた。

母親支援とは、何かを「伝え、指導」するのではなく、「聞き、共感」し、母親が「自ら気づき、解決する」ために教師が寄り添い、共に歩むものであると考える。しかしながら、実際には、聴覚障害に関する必要な情報や育児する上で身につけてもらいたい配慮事項などもあり、「伝え、指導」する側面を持つ場合もある。その場合も、あくまでも主体は母子であることを念頭に置き、個々の状況とニーズに応じた情報を適正に提供していくことが必要になる。母親が子育てに自信と楽しみを持てるように、母親の悩みや考えに十分に耳を傾けながら、母親自身の自己肯定感を支えることは、非常に重要な支援の在り方であるといえる。

また乳幼児が外界や他者と楽しく意欲的に関わっていけるようになるための心理的土台は、自己肯定感の育ちであると言われている。コミュニケーションの意欲と自己肯定感を育てるために、障害の有無にかかわらず、まずは母親が自分をしっかりと包み込んでくれる、という安心感を子どもが得られるようにすることを大切にしていきたい。そして、母親に包まれる安心感から得られる人への信頼感を育み、自分から外界や他者と積極的に関わっていける力につなげたいと考える。

今回Ａちゃんの行動の一つとして、同じことを何度もくり返すことの意味が確認された。くり返しの１回ごとに意味があり、じっくりと遊び込むことで、行動が深化、拡充していくのである。障害の有無にかかわらず、乳幼児が同じことを何度もくり返す姿に出会うことは多い。このくり返しは、思考の発達において非常に大切なプロセスである。子どもの発達に応じた情報を適正に提供し、保護者に子どもの発達をとらえる目を養ってもらうことも乳幼児教育相談の役割の一つといえる。

今回は、コミュニケーションの基礎となる母子の気持ちの通い合いを目指し、その出発点として、Ａちゃんの気持ちの動きに目を向けていくこと、母親と一緒に考えながら気づきを大切にしていくことについてまとめた。今後は、家庭での具体的な生活場面に沿っての気持ちの通い合いや具体的な伝え方についてもまとめていきたい。